

2021年8月8日～8月14日 各家庭でのディポーション用テキスト

■権力を行使する訓練（2/4）

ダビデは臣下に対してやさしかった。一例をあげれば、アドラムのほら穴に隠れていたとき、彼は激しいのどの渇きを覚え、ため息をついて言った。「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ」（1歴代11：17）。すると彼の献身的な三人の兵士が、自分の命の危険をも顧みず、ペリシテ人の前線を突破してその井戸に行き、水を汲んで主君の前に持ち帰った。彼らの愛と忠誠に非常に感激したダビデは、その水を飲もうとはせず、それを主の前にささげものとして注いだ。その水はダビデにとって、三人の兵士の命の血にも等しかった。三人の兵士がダビデを喜ばせたい一心で、命までも危険にさらしたからである。ダビデのような厳格な軍人の胸の中に、このように臣下を思いやるやさしさがあったと、だれが考えるだろうか。

これに似た出来事が、第一次世界大戦のときにあった。私は第一師団に編入されたのであるが、そのときの仲間が、私の入隊以前に起こったその出来事を話してくれた。

第一師団はアルゴンヌ戦線で非常に苦戦し、友軍に救出され、後方の休息地帯に送られたが、ほんの数時間で再び第一線に戻されることになった。敵軍による突破作戦が刻々迫っていたのである。すでに戦いに疲れきっていた歩兵たちが、重い足を引きずりながら、破壊されたフランスの村を通り抜けて前線に戻って行くとき、星条旗は風に翻り、連隊付き軍楽隊は市場の廃墟の中に整列し、旅団長は再び前線におもむこうとする兵を閲兵した。軍楽隊の勇壮な曲に合わせ、星条旗をなびかせ、旅団長に「かしら右」をしつつ隊伍は進んだ。そのとき兵士たちは、旅団長のほおに流れる涙を見たのである。それは疲れ果てた兵士たちを思うやさしい愛の涙であった。フランク・パーカー將軍は、剛毅なウエスト・ポイントの陸軍士官学校出であったが、その心の中には慈母のようなやさしさがあふれていたのである。

私たちもこのようなやさしい心を持っているだろうか。自分の家族に対し、身辺

の人々に対してはどうだろうか。私たちはこれらの人々を、不注意なことばや行動で傷つけやすい。ともに主の働きに携わり、ともに責任を分担し、同じような弱点を持っている同労者に対してはどうだろうか。自分の母につらく当たりながら、他人に対して真に礼儀正しくあることはできない。父を非難しながら、愛する人のことを心から思いやることはできない。家庭や教会内で不親切な態度をとりながら、キリストのために真に首尾一貫したあかしをすることはできない。指導者としての資格、権力を行使する訓練の真のテストは、やさしさということである。

ダビデは、自分を侮辱し、悪口の限りを尽くす敵に対してさえ、やさしさを失わなかった。それと対照的に、イスラエルの初代の王サウルほど、王として不適格な、無礼な人物は多くない。サウルは、単なるねたみのゆえにダビデの命を一その民をペリシテ人のくびきから救い出し、その国に平和と繁栄をもたらした若者の命を一求めて追っていた。サウルはあたかも荒野で食物を求める野鳥のようにダビデに迫ったので、ダビデは常に生死の間をさまよっていた。しかしついにダビデにも、サウルに仕返しのできる好機がやって来た。というのは、あるとき、サウルもサウルのしもべたちもぐっすり眠っていたのである。ダビデは暗がりの中を、そっこの無慈悲な敵に近づいた。しかし彼は、サウルの命を取ろうとはしなかった。ダビデがサウルを意のままにすることのできる機会は、一度ならずあった。ダビデの従者たちは、サウルに復讐するようダビデに勧め、せめて自分たちが彼のためにそうすることを許してほしいと願ったが、ダビデは承知しなかった。ダビデは従者たちに言った。「私が、主に逆らって、主に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。」「主に油そそがれた方に手を下して、だれが無罪でおられよう」(1サムエル 24：6、26：9)。事実上ダビデは、ずっとのちに主イエスが「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです」と言われたみことばを、あらかじめ実践していたのである(マタイ 5：44、45)。